

2023 口語詩句賞総評

林 桂

応募の中で、この一年で佳作として私が推薦した作品が十編を超えている作者を第一次候補として残し、応募作を検証することとした。十六名が該当する。

その上位から確認することとしたが、二十編を超える作者が四人いたので、この中から特選に該当する作者がいるかどうか確認を行った。

結果としてさいう氏を推すこととした。

じだんだをうまく踏めない

いもうとが

抱きしめている

かいじゅうずかん

*

ぬるく発光

している

きみのたましいを

きんもくせいは濡らしつづける

*

きみの髪を

かわかしながら

みるゆめの、すべて

に満ちる すいぎんの影

*

百合の花を
ひとふさ
胸に垂らすとき
かなしみ だけが液状である

短歌体の多行形式。柔らかい言葉遣いで展開する世界は、最後の一行で纏まり昇華する。自身の文体と方法を持った作品は、十編纏めることで、その力量が一層はつきりする。私の目からは必ずしもベストの十編ではないが、それが瑕疵には感じられなかった。

私の中での次席は、奎いう子氏。

丁寧に軍手を干して海女の午後

蚕ふしふしふしと不死噛み砕く

梅雨入りを逃げて琥珀の中にいる

半夏生まばたきだって水の音

俳句体で書く作者の中では、群を抜いている。今期は長きに亘っての投稿で、好調を維持していた。私が、佳作に推した数では最も多かった作者である。俳句らしさと、それを超えた口語詩句のスキームで考えても、感性豊かな作者と言える。

残りの二人は、ビスコ氏と加藤万結子氏。ふたりに共通する印象は、所謂生活、日常を書く作家だということである。コンクール形式の中で、勢い修辞の巧みを競う傾向が強くなる中で、口語詩句の投稿者では少数派と言ってもよいかもしいない。もちろん、書かれたことが、フィクションなのかノンフィクションなのかは分からないし、問わない。ノンフィクションの世界のように読ませる作品群を書き続けているということである。そこには読者に作者像を結ばせる力が働き、作品を重層的に読ませる力が働く。所謂作家性が加わるのである。

ビスコ氏。

つぶれた目玉焼き
殻の入ったオムレツ
世界一美味しかった父のごはん

*

古書店の空間がすき
狭さも匂いもほこりさえも
父と最期に来た時のまま

*

父親参観日
拙い作文をいつも
褒めてくれたから
今でも書くことが大好きだよ

父子家庭で育った「作者」が、今は亡き父を偲び、父との生活を反芻する。全体に甘やかな世界が満ちているが、それは作者の表現の甘さではなく、作者の創造によって実現した世界であろう。例えば、一冊の作品集のような形で纏ってみれば、作者の力量は一層はつきりするものと思われる。

加藤万結子氏。

お見舞いを禁止されてる
日曜はみんな等しく
ひとりぼっちだ

*

郷愁は濃い塩鮭に宿ってる

*

散歩から帰って
眠っている犬よ
明日の朝には
にいちゃんはいないぞ

自身の病気入院、子息の自立旅立ち、そして東日本大震災の影響で故郷・福島を追われての日々。それが深い心象で作品に投影されている。

ビスコ氏、加藤万結子氏ともに、残念ながら、選外という結果に終わっている。読者がいることをこの場で伝えたい。

松下誠一氏。

茄子を煮る夜になっても構わない

こっちこそ蛸を仲間にしてごめん

きのうまで稲妻だったキリンたち

俳句体の一物仕立ての文体で、何か脱力系の感じがする世界。しかし、その実、詩的屈折に満ちている。一読、忘れがたい強い印象を与える。ただ、難しい世界を目ざすだけ、必ずしも成功するとは限らない。確率を上げることができれば、大化けする作者かもしれない。

マズルカ氏。

美しい骨を遺して死にたくて

花の香りのミルクを選ぶ

*

信じ合うことが自然と出来ていた

放課後二人のじゃんけん戦争

*

都会から来た子が一人飲んでいる

遠くの山のそらいろの水

短歌体の作者。言わば青春短歌の王道のような作品。人生の中で限られた時期

にしか書けない世界がある。たくさん書き残して欲しいと思う。選外を惜しむ。

桜望子氏。

透明な
瓶に砂糖を入れ替える
身体表現は得意ではない

*

来るかもわからない
人を待っている
自らの蜜で開かない
芍薬をぬるま湯で拭く

*

自己陶醉するメタファーに
食べさせてやる天牛

短詩体で書く貴重な作者。投稿歴は長い作者ながら、必ずしも作品数が多くはなかった。初期から、最も注目した作者だった。やや難解、暗めな世界観だが、もっと評価されてよい作者だろう。

推薦枠十名に対して、残りは三名となったところで、長谷川柊香氏、中矢温氏、香取小春氏が同数佳作推薦。吉沢美香氏、真島しましま氏が一作品差で続き、山本先生氏、貴田雄介氏が続いていた。この中から三名の推薦に該当する作者がいるか改めて検証し、中矢氏、香取氏、吉

沢氏を推薦とした。

中矢温氏。

真昼間の柱時計を巻く仕事

貸ボートみな八月の湖のうえ

空に鳶鉄条網に毛布干す

松下氏が俳句としては異彩を放つのに
対して、中矢氏は、俳句らしい俳句と言
える。俳句の表現水準が体得している方
法を、中矢氏は体得している。一定のレ
ベルを維持していて安心して見ていられ
る作品を展開している。

香取小春氏。

未来から来ました

銀の鹿を追って

*

蛇口をひねる

イメージをして飲む

水のゆうれい

夢のゆうれい

*

カーテンに洗濯ばさみすすなりの

造花のようなわたしの暮らし

短詩体が基本の文体である。「生活」と「想像」のあわいを生きるような感性は、読者を誘う。選外を惜しむ。

吉沢美香氏。

春眠の氷砂糖の芯濁る

水筒の氷鳴る坂若葉風

*

雨漏りの溜まる花瓶

神の旅

俳句の表現として巧みであるばかりでなく、時に多行表記併用するなど、柔軟な表記意識も持ち合わせている。前回は私の推薦の上位四名の一人であった。しかし、その後、やや不調のように見えた。また、奨学生も逃したのではなかったか。その折りの私の推薦リストにも入っていなかったはずである。いまだ完全復調のようには見えず、私の推薦も決して多い数ではなかったが、それでも残った作品は粒だっている。最後に推した所以である。新人賞受賞を祝す。

以下、最後まで候補に残した作者とその作品を挙げる。賞は一定の枠組みの中で推薦を行う以外にない。十編で切るの

はあくまでもその枠組みがあつてのものである。ここに私の絶対的な評価のラインがある訳ではない。

長谷川柊香氏。

寒晴の少女コントラバス背負う

コンビニは常に明るい敗戦日

月光にピアノの蓋を閉じ卒業

前は私は首席に推した作者。力は疑うべくもないが、前回の作品の方が、私の中では光る。そう思いながら読み続けたことが、佳作推薦の数の少なさに表れたのかもしれない。

真島しましま氏。

ぬれている市役所の建物のように
限界なのよなんとなく、こう、

*

雨の日の化学室の机はひんやりで
蛍光ペン(青)の匂いが滲む

*

夏の藍色の脱皮をする空を
さわれないペンギンが泳いでる

短歌体の作者。短歌としてはやや異色

か。寂寥感とペーソスとユーモアとが渾然となつて、読んで強く心に残る。

山本先生氏。

日本に生まれて半ズボンを履く

人に詩がなかったとして鳴く蚯蚓

僕も君も誰もかたじけないバナナ

日常を、少し離れた非日常的な視点で捉える。ユーモアともペーソスとも読める世界観が、印象的だ。

貴田雄介氏。

幼子は水をこぼしてばかりいる

地球は水の惑星だから

*

ぼくらは風が強い日に集まって

黙ってそれを見つめ続けた

働きながらの子育てパパの姿が垣間見えて、声援する思いで読んできた。今回の自選にはそうした作品が少なく、作者像を結ぶ上で、私にはややインパクトに欠けたきらいがあった。

うろ仔氏。

片足に重心かけてハム切って
麺をだるだる茹でる真夏日

*

漬け込んだ袋の中の鶏肉を
ねるんもろんとあやすのが好き

「だるだる」「ねるんもろん」など、独特
のオノマトペが光る。

小島涼我氏。

恐竜が滅んだ理由を話し合う
伸びすぎたカップラーメン啜って

*

最初から思い出なんてなかったよ
「グリコ」でグーだけ出す跨線橋

恋愛、失恋歌(?)が多いが、私が惹か
れるのは、それから少し外れた、掲示の
ようなテーマの作品だった。